

言語・文化論序説：ことばと文化の関係を整理する ：第一部 言語・文化論の危うさについて

竹内，義晴
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4260>

出版情報：言語文化論究. 1, pp.63-70, 1990-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

言語・文化論序説

——ことばと文化の関係を整理する——

第一部 言語・文化論の危うさについて

竹内義晴

0. まえがき

言語という対象は昔から多くの人の関心を集めてきた。今日でも、言語に関心をいだく人は多い。ところで、言語に興味を向ける人たちの多くは、言語と思考様式・文化との強い結びつきを前提として、その関係に強くひかれているようだ。それぞれの言語にはそれぞれのものの考え方がある。そういう主張は、外国語の教育の場や、または、哲学、歴史、文芸など様々な場で繰り返されていて、またそれなりに「ことばと文化」の一面をとらえている。それぞれの異なったことばを話す人たちの「ものの考え方」が互いに異なっているということは、非常に目につきやすい。また、そういう「ものの考え方」の違いが原因となって、相手に対する「驚き」や「無理解」、「不信」や「怒り」などが生まれ、時には摩擦を引き起こしたりしていることは事実だろう。

しかし、それでは、そのような「思考様式の差異」の根拠・原因を簡単に「ことばの差異」に求められるものだろうか。これが私の素朴な問いである。文化や思考様式の違いを言語の異なりという切り方で整理することにより、のめり込んだ議論を耳にすると、なにか大切な問題がすりすりすりと抜け落ちてしまっていると思わされる。生身の人間が、それぞれの社会集団を形成し生活を営み、ものを考え、感じ、理解し合ったり、衝突したりしているという、人間の存在の総体とでもいえるべき視点が欠落してしまう。

このごろの「国際化」の時代にはさすがに

ひんしゆくを買うことも多いようだが、日本語には固有の日本文化の背景があって、その意味や文化との関わりは外国人には理解できないとか、外国にはない独特の表現や発想が日本語にはたくさんあって、そういう表現は外国語には翻訳できないとか、そういう種類のことが、本気で発言されたりする。ちょっと突っ込んでみると、そういう議論の大半はグラグラと頼りのないものになる。しかし、そんな種類の「日本語・日本文化特殊論」が、経済の力に後押しされた一種の優越感がらみで言い触らされていて、人々の心の片隅に強く居座っているようだ。

現代の言語学の歴史を踏まえている人は、少なくとも単純・素朴に言語と文化を同一視したり、言語や文化について強力な相対主義を主張することはしない。しかし、一般にはそういう言語と文化の強い結び付きばかりを強調したり、言語と文化の固有性・独自性・相対性ばかりを強調する議論が受けがよいらしい。常識的に考えれば、一般受けをねらった議論に対して目くじらを立てるのも大人気ないし、賢明な言語学者はくだらない議論に角つき合わせるよりは、自分の仕事に専念していた方がよい。

私自身は言語研究といっても言語表現の意味分析のごくせまい領域に首を突っ込んであくせくしている研究者だから、これまで、自分の研究という営みを社会とか歴史のコンテクストの中で位置付けるような作業に時間をかけて取り組んだことはなかった。ヒロシマやアウシュヴィッツ、そして南京の大量殺人を経験した時代に生きる科学者として、自分

の仕事の意味を絶えず確認するということの大切さはよくわかってはいるつもりだけれど、しかし、そういった考えをまとめるのはもっと年をとってからでもよいと思っていた。

しかし、今日の無邪気な言語・文化論の横行は、目に余るものがある。こういう種類の素朴でもっともらしい議論がまかり通っているということは、少なくとも二つの意味で罪深い。社会的コンテクストに身を置く科学者として、そのままほっておいてよいというものでもない。

問題の一つは、これらの混乱が言語科学という科学領域の発展に逆行するということである。言語は、現象としては、文化、社会など、様々なことがらに関連している。しかし、対象としては、言語は固有の研究領域をなしている。文化だけではなく様々なことがらを不用意に言語研究の問題とからめることは、言語学という科学の対象領域を不透明にするだろう。

もちろん私は言語の科学を文化や社会などの諸々の領域から孤立させることを主張しているのではない。言語なり、文化なり、それぞれに固有なことがらはそれなりに研究し、さらに相互の領域の関係を整理してゆくべきであると、当たり前のことを言っているのである。

もう一つには、言語と文化についての議論を不用意に混同させることは現代の社会・思想状況において、好ましくない影響を及ぼすだろう。その可能性はすでに現実化しているのかもしれないし、そのような社会・思想操作が行われているのかもしれない。

今日の世界には経済・軍事・宗教、民族など様々な要因から、解決を急がなくてはならない問題が山積みしている。こんな時代は人間同士の相互理解、交流がより強く望まれる時代だ。その時代に、言語による相互理解の難しさを不必要に強調したり、そういう印象をいたずらに強く植えつけたりする議論がたびこること自体、不可解なことだといえる。

すでに述べたように、日本人の外国人に対する典型的な対応の仕方の一つが、外国人には日本語や日本の文化は理解できるはずがないのだと決めつけてかかることだといわれている。これは、自分たちが外のことば、外の文化に対して、それをわからないものと拒否してかかることの裏返しだ。こういう態度は言語や文化の固有性・相対性を強調する議論によって容易に裏打ちされ、強化されうる。

人間というのは、そもそも怠慢な動物であって、それはそれでいいのだが、たとえば外国語を学ぶことや外国の文化を理解することに対して中途半端な努力・好い加減な対応しかとったことのない人たちが、自分の怠慢から目をそらし、他者の勤勉を認めない逃げとして、自分勝手な文化論に陥ってゆくことが多いとすれば、それは困ったことだ。若い人たちが、短絡的に自分の言語や文化について誇大妄想的になってみたり、大きく開かれた人間の交流と知識を拡大する可能性をあきらめてみたりしてよいはずはない。

さらに、この頃はさまざまな国際摩擦が議論されるが、様々な具体性をもっている問題がことばや文化の問題に矮小化されてゆく傾向がありがちなのも問題である。事実は事実として、ことばや文化に由来する問題はそれとして解決してゆくという態度がなければ、問題の有効な解決は見いだされない。いたずらな脅しやごまかし合いの応酬は悲惨な事態にまで展開していつてしまう。無理解は無理解を産み、敵意が育ち、大きな力が小さな力を押しつぶしてしまうことになる。

以上述べたような事柄を踏まえ、自分の畑である言語学という科学を私自身がどうとらえているのか、言語の問題と、文化、思考、行動など、それ以外の領域の問題をどのように整理するのか、などの考えをまとめてみることにした。

紙面の制限から、今回、第一部では、言語・文化論の混乱という困った事態についての私の考えを述べて、問題提起とする。つま

り、本論の副題に表現したように、「ことばと文化の関係を整理」しなければならないということが何故必要なのかを論ずる。

次号以下、第二部では、私自身が、言語と言語をめぐるコンテクストについて、どのように整理したらよいと考えるのか、ということをとばの意味の問題を中心に展開する。

第三部では、ことばと文化の関係について多少具体例に触れながら、整理しつつ、総合的な議論を展開する。

第一部 言語・文化論の危うさについて

1. 複数言語間の表現の対応関係

ことばと文化をめぐるどんな混乱があるというのだろうか。以下、少し具体的な議論を始める。特に意味の問題を中心に議論を試みる。まず次のようなありふれた例から始めよう。

1.1. ことばの差異・文化の差異

化学記号で H_2O と表現される物質は、気体、液体、固体の三つの形態をとる。この物質は液体の状態のとき、ドイツ語では「Wasser」とよばれる。しかし、私の知っている日本語にこの「Wasser」を翻訳する場合、ちょっと気をつけないと困ることがある。

1.1) Das Wasser Kocht.

日本語では、「水が沸騰している」という表現はどうもまずいので、この場合は「お湯が沸騰している」としないと全体の感じがしっくりこない。ところで、逆に「お湯」というのをドイツ語になおそうとすることを考えてみる。無理をすれば「das heie Wasser」という語に翻訳できるようだが、このような場合はあまりそのようには言わずに「Wasser」ですますことができる。特に (1.1) のような場合には、「Das Wasser Kocht」といえばその H_2O は「お湯」なので、「Das heie Was-

ser kocht」とする必要はない。

Hanna さんはドイツ語を母語とするが日本語を話すとする。彼女が「私のお兄さんが来る」と言うので、彼女のお兄さんが来ると思って待っていたら、弟が来た。よく聞いてみるとドイツ語の「Bruder」に対応する日本語の表現は「お兄さん」だけだと固く思い込んでいた。Hanna さんがまだ日本語にあまりなれていないとすると、こういうことはよくあるだろう。よく知られているように普通、ドイツ語や英語などでは、「mein lterer Bruder」とか「mein jngerer Bruder」というような区別はあまりしない。

上の二つの例では、日本語の複数の表現がドイツ語の一つの表現に対応していた。「水」と「湯」に対して「Wasser」, 「兄」, 「弟」に対して「Bruder」と言う。逆に、「cow」, 「ox」に対して、「牛」が対応するなど、日本語の一つの表現が英語の複数表現に対応することももちろんある。いずれにしても、こういう現象は数え上げればきりが無い。ある言語の表現について、もう一つの言語における翻訳語の関係が一对一になっていない例、言語表現の間にずれがある例は、ことばと文化についての議論のきっかけになりやすい。

日本語では液体の H_2O を「水」と「湯」、兄弟について「兄」, 「弟」と区別して表現する。ドイツ語はそれぞれについて単語としては、「Wasser」, 「Bruder」の一つの表現しかもたない。そこで、この、日本語とドイツ語の二つの言語では、そもそもその言語の背景となっている文化が違うのだというような議論を耳にすることが多い。

こういう議論での文化とは、事物の把握・整理の仕方、などなどのことをいっている。日本語では「牛」としか言わない動物を、ドイツ語では種としての「Rind」のほかに、雄雌を分けて「Ochs」, 「Kuh」, 種牛を指して「Stier」, 子牛を指して「Kalb」などと言い分ける。ドイツ語の背景となっている文化はそれだけ、肉を食べて生活するという分野にお

いては、奥行が深いのだ、というような議論もよく聞く。このような形で、言語表現の違いを扱う議論に文化についての議論が絡んでくることが多い。

そう考えてみると、日本語では年上の兄弟と、年下の兄弟を区別する「兄」、「弟」の区別をする、ということを知っていれば、上に紹介したようなドイツ語を母語とする Hanna さんの間違いは起こらなかっただろう。または、日本語を話す人達の「文化」では「年上」、「年下」ということをとても気にするということを理解していれば「兄」と「弟」の区別はドイツ語を母語とする日本語の初心者には理解しやすかっただろう。そして、これらの表現を習得する助けにもなっただろう。

しかし、液体の H_2O に対して「水」、「湯」と二通りの表現をする日本語と、「Wasser」の一通りの表現をする英語との、文化的な違いとはいったいなんだろうか。日本人が熱い風呂が好きなのは事実だろうが、あつい飲み物を飲むことは日本の文化もドイツ語を話す文化もあまり変りないような気がする。確かに、異なる言語においては言語表現のありかたがそれぞれに異なっている。しかし、日本人が熱い風呂が好きであるというようなことが、そういう違いを裏付ける文化的な違いだというような議論はかなり大げさだと思う。そのような文化的なことがらと言語表現のありかたの違いを直接的に結び付ける議論を、確信のもてるかたちで構成するのは難しいのではないだろうか。

肉食を禁忌としてきた日本の社会と較べると、欧米の生活が肉食の領域、またはその他の家畜とその利用にかかわる領域で奥行が深いことは歴史的にみても事実だろう。しかし、その二つの文化における差異と、二つの言語における言語表現のありかたの違いのあいだに何らかの直接の関係があるのだという議論が成り立つ必然性はないと思う。この種の議論が推測の域を出ることはない。もちろん、一方の文化・社会においてしか存在しない、

または区別されないものごとについては、その文化・社会にある言語にしかそのものごとを指し示す表現がないのは当然のことだ。カモノハシを知らない社会の言語にカモノハシを名指す表現がない、というようなことを言い立ててみてもしかたない。

だから、ここではそのようなことを議論しているのではない。日本語の「牛」に対してドイツ語では「Rind」、「Ochs」、「Kuh」、「Stier」、「Kalb」などの表現がある。日本の社会にも欧米の社会にも牛という動物は存在していた。この動物について日本語とドイツ語の二つの言語で表現の仕方が違うことが、それぞれの文化の違いと関わっているのかどうかということが問題なのだ。

視野を拡げてみれば、日本語には、「Rind」、「Ochs」、「Kuh」、「Stier」、「Kalb」に対応する単語レベルでの対応はないが、「牛」、「雄牛」、「雌牛」、「種牛」、「子牛」というような複合表現の可能性がある。単語レベルにとどまっているともっともらしい言語と文化の対応についての議論も、複合表現などの様々な可能性を考えるとグラグラしてくることも多い。こんなことを考えてみても言語表現の差異と文化の差異を直接結び付ける議論は難しいということがよくわかる。

言語と文化のあいだに何らかの関係があるような気がすることは確かだ。しかしこのことを主張しようとするのなら、相当に包括的で、本質に迫る議論が必要だろう。エピソードめいたことを並べてみても、外国見聞記のほら話しを超えるものになるはずがない。問題の性格からして、この言語と文化のあいだの関係を論証するような見込の少ない作業に直接挑みかかるよりは、その関係を冷静に整理してみる必要がある。

1.2. 国際摩擦の時代とことばの問題

現代の世界の中で日本の社会がどのような状況に置かれていて、今後どうあるべきなのか、というような問題の重要さがこの頃では

ようやくズッシリと認識されてきた。そして国際関係が重要視される時代における外国語教育をめぐる議論などが盛んになってきた。言語と文化の問題に言及されることも多いようだ。その場合、「そのものとしてのことば」の違い、「文化」の違い、そして「歴史の流れの中での人間や人間集団＝社会・国家」のぶつかり合い、といったことがらが混乱したままに議論されている場合が相当にある。そのところをしっかりと整理して考える必要があるのである。

- 1.2) 国際的な舞台での不幸な摩擦をさけるためには、外国の言語をよりよく理解して、その背景をなしている文化や社会についてよく知らなくてはならない。

というような「お題目」はよく耳にする。

この手の「お題目」は、この「日米貿易摩擦」など国際化の時代に生きている私たちには、もうおなじみのものだ。外国のことばや文化を理解し、さらには日本のことばや文化を理解してもらう努力をしようという掛け声だが、これまで「文化交流」などということをあまり顧みなかった実業界などの方面から聞こえてきたりする。外国から科学技術や理論を仕入れる、商品を売る、金もうけをする、軍事・戦略・政治の力のせめぎあいの狭間をその場しのぎで綱渡りする。そんなことばかりが目立っていたこの国で、こんなお題目が聞かれるようになったのはそれなりに喜ばしいことだ。しかし、この御題目は、私の見る所によれば、少なくとも二つの点で、間違っているはいなくても、誤った理解を導きやすいし、少なくとも舌足らずだ。

1.2.1. 力を背景にしたことば

柳父章の「ゴッドと上帝、歴史のなかの翻訳者」(1986)に次のような例がある。

アヘン戦争前夜とでも言った頃の中国、中華思想が未だ泥にまみれていない頃のこと。

諸国の中国に対する外交はすべて朝貢という形をとっていた。イギリスなども、使節が当時の清王朝に対して貢ぎ物をする、というかたちで外交交渉を行っていた。このイギリスの使節は、正確にはその翻訳の係をしていた宣教師は、中国側に手紙を渡すのに「稟(ひん/りん)」という形式で、中国の公行(コンホン)という政府公認の貿易商人経由で差し出さなくてはならなかったもので、いつも悔しい想いをしていた。なぜなら、「稟」というのは請願(petition)という、家来が主君に対して出す手紙、という意味の語なのだ。また、この「稟」という文書に対して、中国側は、「諭(ゆ)」という命令(order)の形式の文書を、やはり商人経由で返してきた。命令というのも、身分、または、指揮系統の上下関係に強く関与することばの使い方で、上から下へしかなされないのである。

当時の西洋の外交団というか非西洋社会への侵略組織には依然としてキリスト教の宣教師たちが根強い影響力を持っていた。イギリスという国は宗教的にみれば王権神授説のイギリス国教会という宗教のもとにあって、国王はキリストと同格に位置していた。その宗教を信ずる人たちの国王が、異教の国、野蛮人の国、清王朝の王に「家来の」作法をとるということ、そして命令されるということ、そしてその役割を自分たちが負うということとは宣教師たちには耐え難いことであったに違いない。

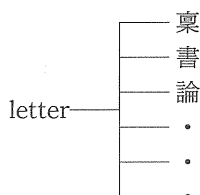
そこで、細かいことは省略するが、イギリス外交団は「書」という対等な関係をあらわす形式で手紙をもって行って、清王朝の役人に直接渡そうとした、そして受け取らせることができなかったので艦隊をつれて行って脅しをかけて中国側に受け取らせた、ということがあったそう。

これらのことが、あの悲惨なアヘン戦争というものを引き起こしていった諸々の摩擦の一角をなしていたというのだ。

ことばという側面をとらえてみると、文書

を表現する語が英語では「letter」のほかにも「petition」、「order」などという語があり、中国語では「稟」、「書」等の幾つかの表現があるということがすぐにわかる。英語の「letter」という語には、その文書を渡す側と受け取る側の関係に対応する使い分けはない。他方、中国語の「稟」、「書」にはそここのところで、使い分けをする、ということに特徴がある。この点に注目すれば、(1.3) 図のように、英語の「letter」と中国語の「稟」、「書」、「論」との対応を一对多の関係とみることができる。

1.3)



英語の「letter」という語を中国語に翻訳する場合に、「稟」とするか「書」とするかが問題となっているのだが、摩擦をさけるのだったら、イギリスの外交団は、「letter」をまちがえて「稟」と翻訳しておけばすむ。中国語とその文化についての理解がなければ、かえって、彼らは「朝貢」の形をとっていることなど知らずに、悔しい思いをせずに済んだだろう。ところが、彼らのなかに中国語の達人がいて、「稟」と「書」の違いを理解できるばかりに、自分たちの少なくとも「対等」の立場、というものをことばに込めずにはいられなかった。

ここでは、イギリス外交団は中国語と中国文化についての正確な理解に基づいて、彼らの外交的行為を行使したことを確認しておく必要がある。それは、中華思想をかかげた清王朝の文化社会に対する挑戦であったのだ。また、当時のイギリスは、アヘンという手段を用いて、人格を破壊し、社会の富をかすめ取り、社会そのものを崩壊させてゆく、そう

いう国家ぐるみの略奪行為を中国に対してしていた。「letter」を「書」と翻訳して、軍艦・大砲を引っ張って行って中国側に受け取らせたというでき事は、この極悪非道を貫くためには力の行使も辞さないという覚悟を示すイギリス帝国の脅し・威示行為、等々でもあったのだ。

1.3. ことばや文化の問題と具体的な事実・真実・歴史

このように考えてくると、お題目 (1.2) の問題点がはっきりしてくる。異なる文化・社会がぶつかって摩擦を起こす場合、その摩擦の原因は様々な複数のものに求められるのは当然のことだ。文化の違いに焦点があてられることがあって然るべき場合もあるだろう。しかし、その場合でも、基本的な役割を果たしているのは、歴史の流れの上での利害を中心とした、政治的な力の関係なのだろう。

文化そのものの違いや、それに起因する摩擦というものに、本質的な役割を求めるのは難しい気がする。文化そのものの違いや、そこに起因する摩擦には、エピソードやきっかけとしての意味はある。しかし歴史そのものが更に大きな枠組のなかで動いていることをしっかり理解しておかないと、ものごとの本質を見誤る危険がある。極端に言えば、意図的な侵略、力づくの略奪を、「文化の違い」のせいにされてはたまらない。

誤解のないように確認しておく、文化そのものの役割を軽視しているのではない。「稟」と「書」の違いによる摩擦の例にしても、文化そのものについては正確な理解の上になって、政治とか、経済とか、歴史の流れの、より大きな枠組において摩擦がつけられるのだということを指摘しておきたい。

私の考えを簡単にまとめると、ことばの違いに起因する摩擦というのは、その背景をなしている文化や社会についての理解の不足だけからくるというわけでもない、ということになる。外国語学校が乱立して、「留学」など

が商業レベルで扱われる時代に、ことばや文化を深く理解しさえすれば異なる言語・文化をもつ社会集団の交渉はうまくやっていける、というような夢がまきちらされている気がする。しかし、ことばや文化や社会についての相互理解が進めば進むほどに、その相互理解にもとづく接触はより深刻な問題を生むということも認識しておく必要がある。

お互いの理解の浅い、摩擦が生れないほどの接触も存在しない関係はもちろん馬鹿げている。現代の戦争の技術、その破壊力、非道さを考えれば、国際的な無接触状態は世界の存続の危機的状態の度合いを極度に高めることになるだろう。国家や、民族、社会グループが互いに不必要な摩擦をおこさずにやってゆくことは、文化、習慣などに対する正確で充分な理解なしには不可能だ。しかし、それだけでは充分でないということをはっきりと認識しておかなくてはならない。

1.4. ことばの規則・文化の規則

似たような議論をもっとありふれた次元におおして、先の例に戻る。例えば、日本語をまだよく話せない人が、「弟」と言うべきところを「お兄さん」といってしまうことから、何か誤解とか摩擦が生ずるとする。日本の社会では、友達の弟よりもお兄さんにより敬意を表するようなこともありがちなことだ。「お兄さんがくる」と聞いた友人は上等なお酒でも奮発したかもしれない。しかし、弟がきたとなると、この上等なお酒は、ちょっと無駄な出費だったという気がするかもしれない。生活の苦しい人の場合、少しばかりムツとするかもしれない。しかし、この擦れ違いの原因が弟を「お兄さん」としてしまったということならば、たいそうに「文化」などと言い立てることもない。そういう摩擦は日本語のことばにおける誤りに引き起こされたものだといってよい。

上の兄弟と下の兄弟を区別するのは日本語の「ことばのきまり」だ。このきまりは、年

齢の上下の区別を気にするという日本の文化の反映かもしれないが、言語の規則として独立のものだ。この「きまり」が守られないと、言いたいことが正確に伝えられず、誤解が生れる。弟を「お兄さん」としてしまえば、それで弟ということが伝わるはずがない。

しかし、ここでドイツ語を母語にした、まだ「日本語」のちょっとできない人が伝えたかったことは、兄でも弟でもない兄弟ということだとすると話は違ってくる。それを表現するのには「兄」いったところで、「弟」いったところで不正確だ。「兄弟」と言うべきなのだろう。しかし、日本語の文としては、「私の兄弟がくる」という文は文法的に正しくても、日本の文化のなかでは、この文の伝える情報は不十分だ。聞いて変な感じがする。それは、兄弟について、「兄」か「弟」かの区別を伝えないと、聞き手のほうでは対応に困ってしまうからだろう。「兄」が「弟」より重んじられる文化においても、疎んぜられる文化においても、「私の兄弟がくる」では、聞き手は上等なお酒を買うべきか、適当なものでお茶を濁すべきかを決められない。

ことばの規則違反は、文化などのコンテキストにおいて何らかの問題を引き起こす可能性をはらんでいる。そして、ことばの上では規則違反がなくても、それぞれの「文化」や「社会」や「歴史」の舞台の上で、事態はさまざまに展開して、誤解や摩擦、不都合を引き起こす可能性がある。そう考えるのが妥当なのである。

先に触れたように、ことばの背景をなす文化をよく理解することは、ことばを習得する上で相当な助けになることだ。そして、そのことばの背景をなす文化をよく理解していなければ、そのことばを使いこなす段階で手上げということになる。しかし、イギリス外交団も中国文化についての正確な理解に基づいていたからこそ、中国語を正確に用いて清王朝に脅しをかけるというダンビラを振りまわすことができた。こんな暴力の責任はその

当事者にとってもらわなくてはならないので がらへの無理解ということに安易になすりつ
あつて、言語や文化の違い、そういったこと けてもらっては困る。

第一部文献

陳 瞬 臣：「アヘン戦争」，講談社文庫

柳父 章（1986）：「ゴッドと上帝，歴史のなかの翻訳者」。大修館

On Language and Culture

—— To Avoid Confusions in Discussing Language and Culture ——

Part One: What is Confusing in the Discussion about Language and Culture

Yoshiharu Takeuchi

The debate on linguistic relativism has made it clear, that language overlaps not necessarily with thought or culture and vice versa. There is still some confusion however, with these two factors, when matters regarding language and culture are discussed. Thereby the recognition of realities tends to be conformed and abstracted in the framework of language. Cultural and other important factors are often easily ignored and one may form his arguments in an arbitrary and misleading way.

The present paper intends to systematically clarify the confused relation of language and culture. A complex system of human intelligence processes linguistic as well as other information into human actions, which have certain socio-cognitive meanings. On the basis of this system, the use of language can be explained as it functions in a real context.

The first part of this paper will attempt to point out problems which can be observed in discussions in which there is confusion of language and culture. Some phenomena which are thought to be concerned with language matters often turn out to be with the cultural matters. A complex event based on cultural and many other factors is sometimes explained only as a language based matter. The essential points can be disregarded or ignored.

Further sections of this study including part two (a systematic description of language meaning) and three (a proposal of a comprehensive theory which interprets language meaning in socio-cultural context and concluding discussions) will appear in following numbers of this bulletin.